文 献 紹 介

小林健太郎著『近江地域研究』

ナカニシヤ出版　1998年6月

A5版　311ページ　本体3500円

本書は，小林健太郎先生が滋賀県に関して書かれた18編の論攷を集成したものである。それらの発表年についてみると，1969年から1995年の長期にわたっている。一方，1985年に刊行された『戦国城下町の研究』（大明堂）の348頁から351頁には，1963年から1983年にかけて先生が発表された「中世後期から近世初頭にかけての地方の中小都市に関する歴史地理学研究」の玉稿リストが掲載されている。それと本書の目次とをあわせて見ると，小林先生の体系の大きさを改めて知ることができる。

本書の第Ⅰ部は，地形学研究とそれを基盤とした水利研究，第Ⅱ部は集落の歴史地理，第3部は都市化や生活圏ならびに農業に関する研究成果，そして第4部はメッシュ法を用いた土地利用の分析である。このように，自然と人文とを問わず，かつまた歴史地理と現在の地理とを含む実に広範なテーマに関する論攷が本書にはまとめられている。読後にまず抱いた感懐は，小林健太郎先生が歴史地理学界を牽引された，日本を代表する歴史地理学者であるにとどまらず，本当の意味での真の地理学者であったということである。

とはいえ，「あった」と過去形で書かねばならないことは，誠に残念なことである。「刊行のことば」には，小林先生が生前に本書の構想を固めていらっしゃったこと，ならびに京都大学地理学教室の後輩で，滋賀大学で同僚でもあった秋山元秀・高橋誠一・野間晴雄・松田隆典の四氏が編集を担当されたことが記されている。すなわち本書には近江に対する小林先生の熱い思いと4人の方々の小林先生への思いとが込められているのである。読み終えた時，胸と目頭が熱くなったのはきっとその故にちがいない。

本書に収録された18編の論攷のうち，6編は先生が29年間勤務された滋賀大学教育学部の紀要に発表されたものであり，7編は単行本や報告書などで分担執筆されたもの，そして5編は県下の自治体史で分担執筆されたものである。上述のように，本書で扱われている論点も多岐にわたっている。したがって本書を読めば，小林先生が滋賀県のどういう地理的事象に関心をいだいていたかがわかる。と同時に，先生が滋賀県の環境についてどのような関心と危惧を抱いていたかも明らかとなるのである。

最終章ではメッシュ法と修正ウィーバー法を用いた土地利用の分析を，「上述のような土地利用の変化によって琵琶湖集水域の環境がかなり著しく変化を受け，それも環境保全の上からは好ましくない方向へ向かって動いてきたことは確かであろう」と締めくくっている。一方，近江の地形と気候，そして琵琶湖総合開発と環境保全などが論じられた序の「湖国と風土」の末尾では，広範な住民運動の大きな成果として有リン合成洗剤の追放がなしとげられたことが紹介され，ならびに「琵琶湖の環境状況は必ずしも好転しておらず，なお一層の努力を必要としている」と述べている。最終章と序の初出はそれぞれ1981年と1984年である。そして『戦国城下町の研究』が刊行されたのが1985年であることも勘案すると，小林先生は戦国期という過去の空間を研究対象としつつ，同時に近江の環境とその未来を考えていたことがわかる。

さて第Ⅰ部では，滋賀県全域の地形区が区分されて後に，野洲川下流の左岸平野の地形と地質・草津市域の天井川・竜王町と蒲生町の地形ならびに愛知川扇状地北半部の地形と農業水利が論述されている。方法的には，空中写真判読と精細な現地調査を行ない，ボーリングデータを多用している。そのうえで，地形の人為的改変に関して歴史地理学的観点に立って説明されている。たとえば野洲川下流の左岸平野で原初的な扇状地の微地形が次第に失われていったのは，古代に条里制が施行されて後に継続的に行なわれた農耕によるものと指摘している。また，草津市域の天井川に関して，流路が条里制土地区画によって人為的に固定されたとの説明が行なわれている。

第Ⅱ部では，まず琵琶湖畔の戦国・近世城下町が概観されている。そのうえで，信長の安土城建設が湖上交通との関係によるという考え方では，安土城と観音寺城との関係が説明できないと指摘する。観音寺城は信長によって破却されたとこれまで考えられてきたが，60年代末から70年代にかけての発掘によって，信長の安土城が活動していた時に，観音寺城も残されていたことが明らかに

なったのである。要するに湖上交通だけでは安土城の建設は説明できないのである。この点について，小林先生は足利先生の学説を引用し，坂本城や長浜城と「のろし」などの信号をやりとりすることが安土城建設の理由だとされている。第II部第3章の「甲賀武士と信楽」では，「過去には認識されていた地域名称の用例を検討することによって，過去には認識されていたにもかかわらず今日では見失われてしまっている地域的な実体を浮き彫りにする」という方法を用いて，「郡中惣そのものが，14世紀以来の歴史的過程を通じて（中略）甲賀上郡という領域を基盤として成立したものであった」と論証した。

第4章では，M.G.R.Conzen のプランユニット分析を援用し，鳥居前町の多賀・甲賀町の大原市場・甲南町の寺庄を事例として研究している。この章は「歴史的集落のプランユニット分析(1)」という1987年の論文に基づいている。(1)とあることから明らかなように，先生はこの方法を用いた多数の論文をおそらく準備されていたに違いない。本書の181頁では，プランユニットが整理されたあとに，その特色と意義が十分に解明されていないこと，ならびに建造物について検討できていないなどの不十分な諸点を列挙したあとで，今後の課題を明確にされている。われわれが，(2)以降の論文をもはや拝読できないことは実に残念なことである。

第III部では，大津・草津・栗東町・姉川上流の山村ならびに高島町の農業集落が対象とされている。地名からも明らかなように，湖南・湖北・湖西を取り上げている。大津に関して，古代から1970年代までの歴史地理が整理され，歴史的厚みを無視して都市を理解できないことが示されている。

第2章では，草津市の人口動態が詳細に検討され，市街地の拡大と住宅地開発が論じられている。近年のことがらに重点を置く都市地理学者とは異なり，野村・上笠地区におけるいわゆるミニ開発が袋小路化を回避できたのは，古代以来の条里制区画が今日まで維持されてきたことに求めている。

次に発足当時の栗東町に関して，その詳細な経緯がまとめられている。また姉川上流の山村に関して通婚圏・転出圏・買物圏などについて実に詳細な地域調査が行なわれている。特に，現在では使用できなくなった戸籍関係の資料を用いて，1925年から1936年までにおける集落内婚の多さや姉川上流域の山村が岐阜県揖斐郡の山村と結びついていたことなどの諸事実が紹介されている。さらに，このころには中心集落の鍛冶屋集落との関わりが顕著であったが，燃料革命を経て長浜との関係が次第に強くなってきたことが論じられている。

高島町の農業集落に関する叙述では，1963年の近畿圏整備法に基づく計画が，農業や農村をまったく位置づけていないと手厳しく批判している。そして，「都市・農村間の所得格差に象徴される農村の停滞性を克服しようと努力している農民の姿を，滋賀県高島郡高島町宮野に事例を求めて述べて」いる。たしかにこの章は1960年代後半までの状況を述べているものである。とはいえ，地域計画に農村を位置づけることを主張されているように，行政に迎合するのではなく，批判的に正論を展開されている。産官学の連携が声高に叫ばれる昨今，先生の姿勢を通じて，毅然たることの重要性をあらためて痛感した次第である。

地域の研究はもはや地理学者の独占物ではないことは明らかである。であるだけに，われわれは地理学がいかに地域研究をおこなうべきかを再考すべきであろう。この点について，本書に表現された小林先生の地域観を通じて，後進のわれわれは大きな示唆を得ることができる。歴史地理学者はいうに及ばず，近江の環境と未来に関心を抱くすべての方々に熟読をおすすめしたい。

末尾ながら，小林健太郎先生のご冥福を衷心よりお祈りし，本書の紹介とさせていただく。

（河島一仁）

石井　實著：

『地理の風景－古代から現代まで－』

大明堂　1999年9月　B5版　190頁

3,200円

私事で恐縮だが大学1年生のときに二人の先生から，授業で写真の撮り方について教わったことが，今でもフィールドワークや旅行にでかけて写真を撮るときの大事なノウハウとして大いに役立っている。一人は浮田典良先生で，「人文地理学IV（地理実習）」の授業で調査等に出かけて現地で写真を撮る際には，少なくとも遠・中・近の3つの距離から被写体を撮るべきことを教わった。お供した調査や巡検でも先生が同一の農業景観を様々な距離から何回もシャッターを押されていたことが強く印象に残っている。もう一人は藤木高嶺先生（当時，朝日新聞社）で，「文化人類学IV